

満洲ピジンの音韻的特徴について

萩原 亮

1. はじめに

本稿は、中谷鹿二著『日支合辦語から正しき支那語へ』（1926年）を対象として、「満洲ピジン」¹の音韻的特徴を考察するものである。ここで言う満洲ピジンとは、日清戦争開始（1894年）から第二次世界大戦終結（1945年）にかけて、主に中国東北部で使用されていた中国語と日本語のピジンを指す。文献に記されたピジンの音韻体系を正確に把握することは難しいが、中谷の著作における満洲ピジンの語句や例文中の漢字には発音を表す日本語のフリガナが振られており、それらをもとにいくつかの特徴を取り上げて論じることにした。

2. 先行研究

満洲ピジンに関しては、初期の丸山（1942）や金田一（1957）などに断片的な言及が見られるが、その概要を記述した最も早い著作は安藤（1988）であろう。安藤氏はいわゆる満鉄²沿線で使用されていたピジン「沿線官話」と称し、中国大陸で旧日本軍兵士が使用していた「兵隊支那語」の起源はこの「沿線官話」に遡ると述べている。また安田（1996）は当時の官吏登用制度に対する分析から「協和語」に言及しているが、それは語彙レベルの接触到留まり、中国語に流入した日本語語彙や固有名詞と見るのが妥当であるとしている。

近年の満洲ピジンに関する言語学的な分析を行った研究としては張守祥、金水敏、桜井隆、四宮愛子の四氏が挙げられる。張守祥（2011）は「協和語」という名称を用い、旧満洲国内で流通していた「軍事郵便絵葉書」³を資料として当時の言語接触の実態を分析している。同氏によると、「協和語」は一般的なピジンの理論に当てはまる部分も見られるが⁴、語彙に関してはピジンの特徴である「限られた語彙」という範囲を超えて多岐にわたっているという。

¹ このピジンに関しては複数の呼称が存在するが、本稿では「満洲ピジン」に統一する。

² 正式名称は「南満洲鉄道株式会社」。1906年に設立され、1945年に中国に接収された。

³ 戦地にいる軍人と日本にいる者との連絡に用いられた絵葉書。登場人物が満洲ピジンを用いて会話している場面を描いたものがあり、満洲ピジン研究の資料となりうる。

⁴ 張氏はTrudgill（2002）が示した縮小化（reduction）・混交化（admixture）・合理化（simplification）という3つのピジンの特徴を挙げ、音韻面と統語面においては混交化と合理化が認められるが、語彙レベルでは縮小化していないという。なおsimplificationに対する「合理化」という訳はロング（2010）によるもの。

金水 (2014) は「兵隊支那語」などの中に見られる「アルヨことば」⁵を取り上げ、それが実際に生活の場で用いられていたものではなく、バーチャルな言葉、即ち「擬製ピジン」であると述べている。

満洲ピジンに関する先行研究の中で最も網羅的なものは桜井 (2015) である。桜井氏は使用地域あるいは話者に限定されない名称として「戦時ピジン中国語 (Wartime Pidgin Chinese)」を提案し、『日支合辦語から正しき支那語へ』を中心とする中谷鹿二の著作以外にも、従来重視されてこなかった従軍記や回顧録、部隊史など様々な資料の中から関係する記述を集めている。桜井氏はそれらの資料を基に、当時の社会における言語接触の状況やピジンの発生から消滅までの道りを詳細に描写するとともに、その言語的特徴にも触れている。また、満洲以外の地域で使用されたピジン中国語の変種⁶の存在を明らかにしている点も貴重である。同書は更に巻末の附録として中谷の著作を再録しており、資料集としても高い価値を有している。

四宮 (2017) は中谷の著作に見られる「日支合辦語」を言語的特徴と社会的機能の両面から分析している。その言語的特徴については、語彙や構文の分析を踏まえて、通用する範囲や表現可能な内容が限定的な「限定ピジン」の段階にあるとし、またその社会的機能については、日本人と中国人の間で相互に機能するものではなく、主に日本人社会の間で使用されていた「ジャーゴン」の段階にあったと述べている。

3. 資料

3.1. 中谷鹿二とその著作

満洲ピジンの分析に用いることのできる主要な資料は、旧日本軍陸軍通訳であり、中国語の専門家でもあった中谷鹿二 (生卒年未詳) が著した、全33回にわたる『満洲日日新聞』⁷の連載コラム「正しき支那語の話し方と日支合辦語の解剖」(1925年)とそれをまとめた小冊子『日支合辦語から正しき支那語へ』⁸ (1926年) である。

中谷に関して、伝記や人物事典には一切その記録が残っていないが、李素楨 (2013) によると、中谷自身の著作によって多少の手がかりを掴むことができるという。それをまとめると以下の

⁵ 「私中国人アル」のように、中国人の話すステレオタイプとしての言語。金水氏はこれを、実際には存在しない役割語の一種であるとする。更に氏は漫画や映画、アニメなどのポップカルチャーの中で成長してきたアルヨ言葉の変遷について描写している。

⁶ 桜井氏は上海、北京、天津、張店、石家荘、太原、杭州の諸都市において存在したとされるピジン中国語の記述を引用し、その地域差に言及するとともに、中国大陸の各地に存在したピジンの総称として「大陸ピジン中国語 (Continental Pidgin Chinese)」を提唱している。

⁷ 実業家の星野錫 (1854~1938) によって1907年大連で創刊された新聞。1927年に『遼東新報』を合併して『満洲日報』と改題するが、1935年には『満洲日日新聞』に復題。1944年『満洲新聞』と合併し『満洲日報』となり、1945年の終戦まで続いた。

⁸ 大連、満書堂書店刊。本稿では関西大学東西学術研究所蔵本を用いた。

通りである。中谷は1895年（明治28）前後に長野県に生まれた。1908年から1909年（明治41～42）に東京の善隣書院⁹で中国語を学び、1914年（大正3）に旧日本軍の陸軍通訳となる。中国に渡り、青島で通訳に従事した後、大連に移り、1930年に中国語学習雑誌『善隣』を創刊する。15年に渡ってその刊行を続けたが、日本の敗戦に伴い同誌は停刊となった。中谷はその他にも日本人向けの中国語検定試験の問題作成に関わるとともに、中国語学習に関する著作¹⁰などを多数出版している。

『日支合辦語から正しき支那語へ』は新聞連載である「正しき支那語の話し方と日支合辦語の解剖」をまとめたものだが、そのはしがき及び凡例によると、当時満洲地方で生活していた中谷は、日本人・中国人双方の間で日本語とも中国語ともつかない言語、「日支合辦語」が使用されているのを好ましくない事態と捉え、正則の中国語との対照によってその誤りを正すのが目的であったことが分かる¹¹。

同書は全169頁からなり、次のような構成を取る。

はしがき（全4頁）

凡例（全7頁）

本文（イの部～スの部）（1～82頁）

日支合辦語集附正しき支那語

ボーイに對して（83～100頁）、買物に就て（101～113頁）、人力車及び馬車に對して（114～120頁）

附録

日常用單語（121～136頁）、各地名（137～144頁）、簡單なる日常用會話（145～169頁）
主体となる本文は、満洲ピジンの語彙を「イロハ」順に見出し語として並べ、正則の中国語における語彙と比較し、解説を加えたものである。最初の一語の部分を挙げると以下の通り。

イケンデ
一樣的

これは支那語で「[○]同[○]じの」と云ふ言葉であるが一般に妙な使ひ方をやつてゐる傾がある。

1 這個^{オヤカイケンデナラ}一樣的拿來

⁹ 中国語教育者である宮島大八（1867～1943）が1894年に設立した中国語と書道を学ぶ学校。

¹⁰ 代表的なものに、『華語助字の活用』（善隣社、1932年）や『やすく覚えられる支那語の會話』（善隣社、1933年）などがある。

¹¹ 「支那語研究には大家の物せられた立派な書物が澤山ある本書は唯目下盛んに日支人間に使はれてゐる聽苦しい日支合辦語から正則な支那語への道案内として書いたものであるから讀者は本書に依つて誤りを正したる上更に研究を積まれたい。で、こんな小冊子でも諸君が参考としあの聽惡い合辦語から脱し、正しき支那語に辿り入る階梯ともなれば著者の本懐とする次第である。」（凡例7頁）

2 這個一樣的^{チウカイヤンデホニ}好

「1」は「これと同じのを持つて来い」「2」は「これと同じのが良い」と云ふ意味で使ふてゐるらしいが「と」と云ふ「てにをは」が抜けてゐるため邦語に譯すと「これ同じの持つて来い」「これ同じの良い」と云ふやうな間の抜けた言葉が出来上つて了ふ、これには單に「和」又は「跟」と云ふ語を冒頭に冠せて使へば完全な支那語が出来る。(1頁)

「日支合辦語集附正しき支那語」の部分は場面別の会話集と言えるもので、満洲ピジンと正則の中国語を対照している。最初の一文を挙げると以下の通り(「合」は日支合辦語,「正」は正則の中国語)。

ボーイに對して

合 你的^{ネーヂ}まだ飯^{メシ}々^{メシ}没有^{メイユウ}か お前まだ飯を食べないのか

正 你^{ニーハイメイ}還沒^{チーフアヌマ}吃飯^マ麼¹² (83頁)

最後に附録として、正則の中国語の日常用語、地名、簡単な日常会話集が加えられている。

当時同書がどの程度流通し、正則の中国語教育にどの程度役立ったかということは不明であるが、結果的に中谷の著作はまとまった量の満洲ピジンを記録した貴重な資料となっている。中谷によれば、著作中の例文は自身が直接見聞きしたものを収録したという。同書が刊行されたのは大連であるが、上述の通り、中谷は1914年に旧日本軍陸軍通訳としてまず青島に赴き、その後大連に移ったとされているので、具体的にどこで収集したのかという点は不明である。本稿では『日支合辦語から正しき支那語へ』の本文及び「日支合辦語集附正しき支那語」における満洲ピジンの語句と例文を対象に、漢字に付されたフリガナの分析を通じてその音韻的特徴を明らかにするとともに、それに影響を与えた中国語方言について考察する。

4. 音韻的特徴

『日支合辦語から正しき支那語へ』における満洲ピジンに付されたフリガナを音節表の形にまとめたものを附録に示す。以下ではそこから特徴的なものを取り上げて検討する。

4.1. 韻尾の -n と -ng

¹² 中谷はそり舌音の表記について、「捲舌音とは舌の先を少し巻いて出す音で是、實、池、知、直の如く本書では特に(の印を附してある。尚此音は邦人が頗る無頓着にして區別を明かにせざるために相手の支那人に意思の徹底せざることを往々あり特に注意を要す。」(凡例4頁)と述べている。

中谷は凡例において韻尾の **-n** を「窄音」、**-ng** を「寛音」と称し¹³、それらを基本的に「ヌ」と「ン」で区別している。同書に見られる満洲ピジンの例からその状況を整理してみると以下の通りである。漢字及びフリガナとその出現回数を示す。

-n	-ng
本ペヌ (2)	房フアン (13)
慢マヌ (34)	朋ポン (7) /ポエオン (1)
炭タヌ (2)	通トン (4)
幹ガヌ (4) /ガン (28) /カン (1)	同トン (4)
看カヌ (24)	掌チヤン (7)
三サヌ (8) /サン (1)	脹チヤン (2)
邊ペン (1)	裳シヤン (3)
天テヌ (41) /テン (5)	上シヤン (4)
年ネヌ (1) /ネン (1)	病ピン (1)
錢セヌ (30) /チエヌ (5) /セン (1)	明ミン (6)
現セヌ (2) /セン (4)	釘チン (1)
今キヌ (19)	頂テン (13)
巾キヌ (1)	娘ニヤン (1)
斤キヌ (1)	兩リヤン (7)
親チヌ (1)	清チン (1)
心シヌ (5) /シン (2)	生ソン (1)
辛シン (1)	行シン (14)
甚シヨ (22)	謊ホワン (7)
人イヌ (1)	様ヤン (4)
換ホワヌ (4)	陽ヤン (1)
完ワヌ (7)	
晩ワン (1)	

全体として、**-n** と **-ng** は「ヌ」と「ン」によって区別されているが、**-n** のグループには「邊ペン」「辛シン」「晩ワン」のように「ン」で記したものが見られ、「幹ガヌ/ガン/カン」「三サヌ/サン」

¹³ 中谷は窄音と寛音について、「窄音とは其の語尾狭窄にして鼻音を帯びないもので我が音の「ヌ」英字の「n」で終わったものである。例へば安、金、館、善、寒等の如し。」「寛音とは音が寛潤で鼻音を帯ぶるもので其の語尾は我が「ン」英字なれば「ng」で終る音で例へば長、京、經、東、應等の如し。」(凡例 3~4 頁) と述べている。

「天テヌ/テン」「錢セヌ/チエヌ/セン」「現セヌ/セン」「心シヌ/シン」では「ヌ」と「ン」双方の音形が確認できる。一方、-ng のグループに例外はなく、また正則の中国語を記した部分でもこのような現象は見られない。これらについては、中国語音と日本漢字音の聴覚印象が類似している場合に、日本語寄りの発音が行われていたと考えることが可能である。

4.2. 日母字

満洲ピジンには、次のように日母字の声母を「イ」で表記した例がある。

- (1) 你呀這個日本來不是か 「これは日本から来たのではないか。」(112 頁)
 (2) 我的清國人不是 「私は支那人ではない。」(52 頁)

正則の中国語を記した部分では、「日(リー)」「人(リエヌ)」となっている。袁家驊(1960)、佐藤(1997)などによると、東北官話において日母字はゼロ声母で発音されるといい、本書で確認できるのは上記の二字のみであるが、東北官話の影響を考えることが可能である。

4.3. 尖団音の区別

尖団音の区別とは、北京音において舌面音 j-, q-, x- で表される音が、歯音と牙喉音の 2 系列で区別される状態を指す。本来 [ts-], [ts'-], [s-] という声母を持っていたとされる系列を尖音、本来 [k-], [k'-], [h-] という声母を持っていたとされる系列を団音という。日本漢字音で読んだ場合、尖音が「サ行」「ザ行」、団音が「カ行」「ガ行」となる。

同書における尖団音の表記を整理してみると以下の通りである。

表 『日支合辦語から正しき支那語へ』における尖団音の表記

ピンイン	尖音	団音
j	—	今キヌ(19), 巾キヌ(1), 計ヂ(27), 覺ジョー(5)
q	親チヌ(1), 錢セヌ(30) / チエヌ(5) / セン(1), 清チン(1)	起キ(4), 氣キ(8), 去キュイ(8) / チユ(10)
x	西シー(1), 洗シー(9), 小ショー(15) / セウ(1), 心シヌ(5) / シン(2), 辛シン(1)	歇ヒエ(2) / ヒヤ(2), 現セヌ(2) / セン(4)

上表によると、「今キヌ」「巾キヌ」「起キ」「氣キ」「去キュイ」「歇ヒエ」のように団音がカ行及びハ行で記されている例がある。正則の中国語を記した部分ではこのような例は見られない。これについては尖団が合流していない方言の影響を考えることが可能である。多くの北方

方言において尖団の区別は早い段階から失われているが、袁家驊 (1960)、賀魏 (1986) によれば主に山東省及び遼寧省と黒竜江省の一部に分布する膠遼官話には尖団の区別が存在するという。中谷が生活していた青島及び大連はどちらも膠遼官話が話されている地域であるため、彼が見聞きしたという満洲ピジンはこの方言の影響を受けている可能性がある。

4.4. 「的」について

現代北京音で軽声になる助詞を見ると、/ə/ は「個カ」「了ラ」のようにア段の母音で表されるが、「的デ」のみエ段の母音で表されている。

- (3) ^{チヤカハワイラデフス} 這個壞了的不是 「これは腐ったのではない。」 (52 頁)

「的デ」の表記は満洲ピジンの部分と正則の中国語に共通している。これについては、当時の「的」の発音が di に近いものであったという可能性とともに、「的」と日本語の格助詞「で」の混同という要因も考えられる。満洲ピジンには日本語の「で」にあたる表現を「的」と表記した例が見られるからである。

- (4) ^{ニードアトデチヤカテンホシーワス} 你的後的這個頂好洗々忘れるで不行 ^{フジン} 「お前後でこれをよく洗え、忘れてはならんぞ。」 (90 頁)

上の「後的」などを見ると、日本語を母語とする者が、「的」を日本語の「で」に引き付けて解釈していた可能性もあろう。

4.5. 声調について

中谷は凡例の中で声調について次のように説明している。

支那語には四聲と云ふものがあつて凡ての音に四つの異なつた響き方がある。で、四聲とは上平、下平、上聲、去聲に區別し即ち上平とは其の聲が極めて平易に發し少しも高低のないもの、下平とはその語尾が高く上がるもの、上聲とは其の音聲が太くして重く且つ長く語尾を引くもの、去聲とは語尾に力がなく消へて行くやうな聲である。而してこの四聲の符號は書物により多少異なる所があるが重に文字○點或は●點を附して之を表示する。即ち向かつて左の下に附するを上平、左の下を下平とし右の上が上聲に下が去聲である。
(凡例 1 頁)

正則の中国語を記した部分には全ての漢字に対してこの体系により声調の記号が加えられてい

るが、満洲ピジンの部分に声調を示す記号はない。それは満洲ピジンにおいて声調は区別されなかったか、もしくは重要な意味を持たなかったためと考えられる。中谷にしても、脱すべき対象であった満洲ピジンに声調を認めることは憚られたのであろう。

5. まとめ

本稿では満洲ピジンの音韻的な特徴について簡単に紹介した。日母がゼロ声母になる点から東北官話の影響を、また尖団音の区別が一部保たれていることから膠遼官話の影響を考えることが可能である。荒武(2005)によると、清代以降の満洲地域への移民は山東省、特に半島部出身者が多数を占めるとされており、東北官話と膠遼官話の間に密接な関連があることは明らかである¹⁴。かつ、中谷は青島で通訳として活動し、また大連に本拠を置いていたことから、中谷が記した満洲ピジンに東北官話と膠遼官話の影響が見られるのは自然と言える。

一方、4.1. で挙げた「幹ガン/カン」や「天テン」など、日本漢字音の影響と考えられる現象も見られ、満洲ピジンの音韻を論じるにあたっては、中国語の地域的特徴と日本漢字音双方の影響を考慮すべきと思われる。後者については、類型的特徴が異なる言語の接触にあっても、漢字という媒介の存在が無視できないことの証左と言えるであろう。

参考文献

- 荒武達朗(2005)「清朝中期以降中国人満洲移民出身地の分布」、『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』, 12, 25-65.
- 安藤彦太郎(1988)『中国語と近代日本』, 東京: 岩波書店.
- 金水敏(2014)『コレモ日本語アルカ?—異人のことばが生まれるとき』, 東京: 岩波書店.
- 金田一春彦(1957)『日本語』, 東京: 岩波書店.
- 佐藤昭(1997)「東北方言音と北京方言音」、『北九州大学外国語学部紀要』, 88, 1-19
- 桜井隆(2015)『戦時下のピジン中国語—「協和語」「兵隊支那語」など』, 東京: 三元社.
- 四宮愛子(2017)「「日支合辦語」の研究」、『東アジア文化研究科院生論集』, 7, 59-78.
- 張守祥(2011)「「満洲国」における言語接触: 新資料に見られる言語接触の実態」、『学習院大学人文』, 10, 51-68.
- 中谷螢光生(1925)「正しき支那語の話し方と日支合辦語の解剖」、『満洲日日新聞』, 2月11日～3月28日.
- 中谷鹿二(1926)『日支合辦語から正しき支那語へ』, 大連; 満書道書店.

¹⁴ 荒武(2005)では、満洲への移民を3つの時期に分けている。清代中期から1900年まではほぼ山東半島出身者に限られ、その後1920年代まではそれに山東省北部や河北省出身者が加わり、1920年代後半以降は山東省南西部や河南省出身者が増加したという。

丸山林平 (1942) 『『満洲国』に於ける日本語』, 『国語文化講座』第6巻, 134, 朝日新聞社.

安田敏朗 (1996) 「『王道楽土』と諸言語の地位—『満洲国』の言語政策・試論—」, 『アジア研究』, 42-2, 29-62.

李素楨 (2013) 『日本人を対象とした旧「満洲」中国語検定試験の研究』, 東京: 文化書房博文社.

ロング・ダニエル (2010) 「言語接触の観点から見たウチナーヤマトグチの分類」, 首都大学東京『人文学報』, 428, 1-30.

賀魏 1986. 東北官話の分区 (稿), 《方言》3: 172-181.

袁家骅 1960. 《汉语方言概要》, 北京: 文字改革出版社.

Trudgill, P. 2002. Ausbau sociolinguistics and perception of language stauts in contemporary Europe. *Sociolinguistic Variation and Change*. 68-75.

附録 『日支合辦語から正しき支那語へ』 満洲ピジン漢字注音一覧

(凡例)

- ・漢字の現代北京音は拼音により, < >内に韻母, ()内に声母を示す。韻母の配列順序は『古今字音対照手冊』に基づく。
- ・それぞれの漢字の横にフリガナと出現回数を示す。出現回数は見出し語として登場した回数も含む。
- ・漢字に複数のフリガナがある場合は「/」で, また長音符号の有無は「・」で区切る。

<a> (b) 罷バ 1; (p) 怕バ 1; (f) 法フア 3; (d) 達ダー 4, 大ター 96; (t) 他ター 34; (n) 拿ナー 18, 那ナー 8

<ia> (y) 呀 23, 衙ヤー 3

<ua> (h) 話ホワ 18

<e> (zh) 這チャ 40; (g) 個カ 47; (h) 喝ハ 1

<o> (m) 麼マ 22, 没メー 60, 煤メー 2

<uo> (d) 多ド・トー 7; (z) 昨ヅオ 6; (sh) 説ソ 18; (g) 國ゴー 1; (h) 活ホー 38, 火ホワ 8; (w) 我ワ 63

<ie> (x) 歇ヒエ 2/ヒヤ 2

<üe> (j) 覺ジョー 5

<[ɿ]> (z) 子ツ 17, 字ヅ 2; (s) 死スー・スウ 7

<[ɿ]> (zh) 知ヂ 8; (sh) 是ス 15; (r) 日イ 2

<[i]> (d) 的デ 411; (n) 你ニー 142; (l) 禮リ 1, カリー 7; (j) 計ヂ 27; (q) 起キ 4, 氣キ 8; (x) 西シー 1, 媳シ 1, 洗シー 9; (y) 一イー 25, 衣イー 3

<u> (b) 不ブ 44; (m) 母ムー 1; (f) 婦フ 1; (s) 訴ス 1; (g) 姑クー 1; (k) 苦ク 1; (w) 五ウ 1

- <ü> (q) 去チユ・チユ-10/キュイ 8
- <ai> (b) 拝パイ 1; (m) 買マイ 21, 賣マイ 21; (t) 太タイ 1; (l) 來 68; (z) 在ザイ 5; (h) 害ハイ 1;
(k) 開カイ 1; (h) 環ハイ 4, 孩ハイ 6, 海ハイ 1
- <uai> (k) 快カイ 34, 塊カイ 1; (h) 壞ホワイ 24; (w) 外ワイ 4
- <ei> (p) 賠ペイ 2; (m) 每マイ 12; (g) 給ケー-10
- <uei> (z) 醉ツオイ 1; (sh) 誰セイ 12, 水スイ 6, 睡スイ 5; (g) 櫃クイ 7, 貴クイ 12; (h) 回ホイ 3
- <ao> (m) 毛モー-18; (d) 道ト 8; (l) 老ロー-2; (z) 澡ザオ 3; (s) 掃ソー-10; (sh) 少ショ-57; (g) 告
コー-1; (h) 好ホ-35
- <iao> (b) 表ビョ-1; (l) 了ラ 41; (x) 小ショ-15/セウ 1; (y) 要ヨ-14
- <ou> (t) 偷ト-7, 頭ト 2; (sh) 手シユ-1
- <iou> (l) 溜リウ 4; (j) 酒チユ-1; (y) 有ユ-101, 友ユ-8
- <er> (㊦) 兒ル 9
- <an> (m) 慢マヌ 34; (t) 炭タヌ 2; (s) 三サヌ 8/サン 1; (g) 幹ガン 28/ガヌ 4/カン 1, (k) 看カヌ 24
- <ian> (b) 邊ペン 1; (t) 天テヌ 41/テン 5; (n) 年ネヌ 1/ネン 1; (q) 錢セヌ 30/チエヌ 5/セン 1; (x)
現セン 4/セヌ 2
- <uan> (h) 換ホワヌ 4; (w) 完ワヌ 7, 晩ワン 1
- <en> (b) 本ペヌ 2; (m) 門メン 2/メヌ 1; (sh) 甚シヨ 22; (r) 人イヌ 1
- <in> (j) 今キヌ 19, 巾キヌ 1, 斤キヌ 1; (q) 親チヌ 1; (x) 心シヌ 5/シン 2, 辛シン 1
- <ang> (f) 房フアン 13; (zh) 掌チヤン 7, 脹ヂヤン 2; (sh) 裳シヤン 3, 上シヤン 4
- <iang> (n) 娘ニヤン 1; (l) 兩リヤン 7; (y) 様ヤン 4; 陽ヤン 1
- <uang> (h) 誑ホワン 8
- <eng> (p) 朋ポン 7/ポエオン 1; (s) 生ソン 1
- <ing> (b) 病ピン 1; (m) 明ミン 6; (d) 釘チン 1, 頂テン 13; (q) 清チン 1; (x) 行シン 14
- <ong> (d) 東トン 1; (t) 通トン 4, 同トン 4